

第4章「脳を鍛える」

本文要約

スポーツの世界では既にドーピングが大きな問題となっているが、脳の機能を薬理的に向上させる技術（エンハンスメント）もまた、部分的に実現しつつある。向精神薬であると同時に記憶力や集中力を高めるとされるリタリンなどがそれである（ただしこれは日本では睡眠障害の治療以外での使用が禁止されることになった）。

身体的・知的を問わず、優れた技能の習得には、持続的な訓練が不可欠であるが、遺伝的な素質の影響も少なくない。訓練の量と技能の質が比例するのは確かであるが、これは因果関係を意味するわけではない。技能があるからこそ訓練も楽しいのかもしれない（そして何より、訓練を苦しめない集中力や忍耐力こそが、遺伝に大きく影響されるのではないか：報告者追記）。技能の習得には、脳のシナプス結合を変化させることが不可欠であるため、脳の可塑性が高いほど技術習得には有利である。そのため、絶対音感や複数母国語の習得には臨界期があるとされているが、脳の可塑性を薬理的に高めることは既に可能である。私たちの社会は、「努力」では克服できない先天的な差異を許容している。それならば、その差異を後天的に作り出すことに、それほど大きな問題があるとは思われない。

ただし、スポーツや演奏家の場合は、或る特定のルールの下に限られた地位を争っているのであり、薬理的な介入はルールを侵害し、技能そのものの価値を失わせかねない。そのため、ドーピングに対する嫌悪は広く共有されている。それに対して知能は、そうした単純なルールの下にあるわけではなく、知能と社会的成功は必ずしも比例しないため、エンハンスメントが強い抵抗を受けることはないだろう。

講読に際して議論された論点

- ・エンハンスメントの長期的な影響については未知数であり、安全性が確認されるまでは許容すべきでない、とも言う。しかしこれは、新しい技術一般に言える倫理的問題であり、リスクと効用の十分な評価ができない段階であっても、社会的・政治的決断が迫られるという状況は珍しいことではない。
- ・知能と身体技能との間には、それほど明確な違いが認められるだろうか。エンハンスメントの一般化は、社会的な規範やルール・制度全体を、エンハンスメントを当然の前提とする形で変化させるのではないか。
- ・訓練や修練は、単に技術の習得のみを目指すだけのものではなく、それそのものが人にある種の充実感と快をもたらすとも言えるし、それによって養われるとされる集中力や忍耐力といった「精神」にこそ、価値が見出されることも多い（例えば日本的あるいは東洋的な「道」^{どう}の理念）。エンハンスメントはこうした側面を見失わせる可能性がある。

(串田)